

『瓊浦遊草』の世界：大潮元皓の長崎滞在

若木，太一

<https://doi.org/10.15017/4755942>

出版情報：雅俗. 1, pp.117-144, 1994-02-28. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



『瓊浦遊草』の世界

——大潮元皓の長崎滞在——

若木太一

一 『瓊浦遊草』と大潮の著作

長崎県立図書館渡辺文庫に所蔵する『瓊浦遊草』写本一冊は、これまで知られなかった大潮の晩年近い、宝暦三年から四年にかけての長崎滞在時の動静を知ることのできる漢詩文集である。

本書の体裁は次の通りである(図1)。

題簽 「瓊浦□草」

内題 「瓊浦游艸／西溟釋元皓大潮撰」

装訂 大本袋綴(縦26・1×横18・6センチ)。一卷一冊、写本、全73丁(墨付)。濃紺表紙。

印記 未詳(表紙左に角印。5×5センチ。朱、陽)。**不明印**(一丁表右下に長角印。2・5×12・1センチ。朱印を二重に押ししてあり判読不可)。

本書は墨付七十三丁で、大潮の詩二百二十余篇、文章二十三篇及びその他を収める。書風は偕書で大潮の字に似るが、卷末には別筆で大潮以外の詩文が記されており、本人のものとはいえない。伝来は未詳であるが、親しい門人の所有であったかと想像される。というのは大田南畝の『瓊浦又綴』や『長崎名勝図絵』(饒田喩義等編、文化、文政頃成)に、すでに

瓊浦遊草

。瓊浦有感并序

西溟釋元皓大潮撰

余不抵瓊浦。殆將十載矣。而疎百載。手沐瓊露。智諸舊故。革並尋長。近今茲。冬而暮。春之初。望來興。嗟乃賦此詩。故有末句。
十峰積翠映登臺。江色蕭蕭閣閣開。萬古九州碑地。吾邦重澤傑豪才。明珠南海使春到。詞客中原賦。年來十載風流諸子盡。欲言佳事盡難成。
宿雨

図1 『瓊浦遊草』(長崎県立図書館蔵)

本書に収録されている大潮の詩が引用されており、南畝はもちろん『図絵』編集に参画した長崎聖堂関係の儒者、文人の間には知られていたと思われるからである。

では、この『瓊浦遊草』は、大潮の生涯の中でどのような時代の、どのような交遊を記した作品であろうか。

まず最初に、この『瓊浦遊草』に至るまでの大潮の経歴をたどり、出刊された詩文集の内容を概観しておきたい。

大潮は延宝六年(一六七八)肥前国松浦郷伊万里の生れ。俗姓は浦郷氏、名は元皓、字は月枝、法名を大潮という。

また魯寮、西溟、泉石陳人などの別号を称している。

大潮は元禄初年に長崎に出て國思靖^ニ上野玄貞(一六六一一七〇六)について中国語及び儒学を学んだ。まだ十代前半のことであった。元禄五年(一六九二)十五歳の時

に、肥前蓮池の宝寿山竜津寺の道竜化霖(一六三四—一七二〇)の弟子として仏門に入る。師化霖は筑後柳河の人で、宇治の黄檗山において隠元禪師をはじめ、木庵性瑠、独堪性瑩について参禅した学僧である。

この化霖について得度した法兄が後の売茶翁高遊外こと月海元昭(一六七五—一七六三)である。寺を離れた後、この二人は出会う機会は多くはなかったが、生涯かわらぬ友情を交わし続けている。

大潮は元禄十一年(一六九八)夏、化霖の勧めで黄檗山に到り、独堪に謁し、以後四年間京畿において修学。宝永三年に独堪は没したが、その後しばらく大潮は、黄檗山において華音の通事を勤めた。宝永五年(一七〇八)には伊万里へ帰り、また長崎、平戸を往還した。

正徳元年（一七一二）には法弟桃溪と共に江戸へ赴き、徂徠の塾護園の人々と交遊すると共に華語の指導にあたった。正徳五年冬には深川から麻布に移り、草蘆を購ひ「魯寮」と名づけた。大潮の江戸滞在は、一時帰郷もしたが足かけ六年に及ぶ。享保二年（一七一七）に龍津寺へ戻った。

だが、大潮は四十歳になった享保三年から再び旅にあり、泉南をはじめ京都・江戸さらには長崎などの各地を遍歴し、その間幾度か郷里へも帰っている。享保十三年（一七二八）秋には、また江戸へ赴き徂徠の墓参りをし、同十五年まで滞在。翌年は長崎へ到り崇福寺の道本寂伝のもとで年を越す。享保末年には招請されてまた京都の黄檗山に到り、万福寺監寺・都寺を勤め、竹林庵にて六年を過ごした。このようにして四十代から五十代の大潮は旅の生活に明けくれ、各地に多くの詩友を得た。その間、京畿と江戸を何度か往還している。

大潮が「刻明四大家文抄序」及び「刻王氏詩教序」を草したのは元文三年（一七三八）正月、六十歳の時である。明四大家の称揚や『王氏詩教』（王鑾撰）の流布によって大潮の存在とその抛つて立つ所も明らかとなった。詩壇においては、少なからず影響を及ぼした文章といえよう。

こうした大潮の超人的ともいえる壮年期以来の詩作と修業の旅の足跡は、六十代になって次のような詩文集として出刊をみることになる。次に一覧してみよう。

元文五年（一七四〇）『松浦詩集』三卷三冊（京都尚古堂）刊。大潮にとって公刊された最初の詩集。享保八年八月の天産靈苗の序文を付す。正徳末年から享保十一、二年頃の江戸・京・泉南で過ごした四十歳代の十年間の詩を収める。

延享元年（一七四四）『魯寮詩偈』一冊（京都尚古堂）刊。宝寿山竜津寺の浄介焚香の序と無隠道費の後序を付す。享保八年から寛保二年までの四十代後半から六十代半までの詩を収める。

延享二年（一七四五）『魯寮文集』上下巻二冊（京都額田正三郎）刊。延享元年八月付の自序を付す。京都に於て編集の仕上げをしたらしい。上巻に序・記・伝、下巻に銘・疏・祭文・雑・跋及び書牘を配し、およそ元文三年から寛保三年ごろの六十代前半の文章を収めている。

延享五年（一七四八）『西溟餘稿』五卷五冊（京都辻井吉右衛門等）刊。延享四年六月付の岡白駒の序を付す。卷一、三が文部、卷四、五が詩部。文部は序・論・記・伝・銘・碑・説・雜文字義・引・讀・紀事・祭文・跋および書牘を配し、およそ正徳五年から享保十五年頃までの文章を収める。詩部は江戸滞在時の正徳初年に深川に住んでいた頃から始まり、泉南・京都・長崎など各地での生活や交遊の風詠、及び帰郷後の享保十六年までの作品を収める。四十代全般から五十代にかけての詩文集である。

宝曆十一年（一七六一）『魯寮尺牘集』上下卷二冊（京都梅村三郎兵衛等）刊。侍者淨展の編集で、原双桂の序、宝曆三年六月付の主堅曇高の跋を付す。年代を明らかに出来ないものが多いが、およそ『西溟餘稿』所収以降の延享から宝曆三、四年頃までの書簡を収める。大潮七十代の書簡集とみてよいだろう。

以上は大潮の公刊された詩文集である。これにたいして稿本として伝えられたものがある。

『魯寮稿』十七卷十七冊（慶応大学斯道文庫蔵）は、写本で伝来した大潮の詩文集。四種の異なる筆跡が認められ、破損や誤字もそのまま写している。おそらく晩年の弟子筑前の亀井南冥が原本と対校し、朱筆で添削したものではないかと想像する。本書についての詳細は別稿にゆずる。

全十七冊の内容は、卷一の寛保三年（一七四三）に始り、卷十七の明和三年（一七六六）四月に至る大潮の六十五歳から八十九歳までの詩文・書牘等をほぼ年代順に収録したものである。前述のように本書は写本であるが、原本は大潮自身が自分の詩文や書牘を手控えていたものと推測する。この内『魯寮稿』卷八は宝曆三年から四年の作品を収めており、一部分であるが『瓊浦遊草』と重なるものがある。

以上が大潮の著作である。大潮は肥前蓮池の宝寿山竜津寺の第三代大和尚として、明和五年（一七六八）八月二十二日に示寂。九十一年の生涯は修業の旅であり、その行く先ざきでの雅交が全てであった。その人生の日々を記した大潮の作品は、幸いにもこうして大部分が伝存している。

以下に『瓊浦遊草』の世界を窺ってみたいと思う。

大潮の交遊は、禪宗臨濟派に属する唐僧開場の黄檗の分紫山福濟寺を中心に東明山興福寺、聖寿山崇福寺、万寿山聖福寺といった唐寺の僧侶を中心にすることはもちろんだが、唐通事、在留唐人、医師、儒者、地役人などおよそ八十名に及んでいる。

本稿ではこの内、高陽谷が主宰した「芙蓉詩社」に集う唐通事たちをとりあげたい。

唐通事の業務や経歴については、『唐通事会所日録』をはじめ頼川君平編『訳詞統譜』、および宮田安著『唐通事家系論攷』、李獻章著『長崎唐人の研究』が備っており、その出自や家系や官職、生活などの知見がえられる。官職としての唐通事の経歴ではあるが、渡来中国人の子孫として海外貿易の現場で働く生活者であり、また文人でもあった彼らの人生を思いめぐらすこともできそうな記録である。以下の報告において、これら先学の諸書に多くの恩恵をこうむったことを、まずここに記しておきたい。

二 唐通事——芙蓉詩社の人々

宝暦三年（一七五三）三月初旬、七十五歳の大潮は十年ぶりに長崎を訪れた。十代の初めの長崎での初学時代から数えて、おそらくは七・八度目の来遊ではなかっただろうか。

瓊浦有感并序

余不抵瓊浦、殆將十載矣、而林百載、平叔雍、張道智、諸舊故輩、並尋長逝、今茲癸酉、暮春之初、重来興嗟、乃賦此詩、故有末句、

千峰積翠映登臺、千峰の積翠、登臺に映り

江色霏微館閣開、江色霏微として館閣開く

禹貢九州雄鎮地、禹貢九州雄鎮の地

吾邦重譯傑豪才 吾邦重譯傑豪の才

明珠南海乘春到 明珠は南海より春に乗じて到り

詞客中原賦月来 詞客は中原より月を賦しに来る

十載風流諸子盡 十載の風流に諸子盡まじしく

欲言往事意難載 往事を言はんと欲すれど意載せ難し

序に言うように大潮は寛保三年（一七四三）以来の来崎で、旧知の唐通事林百載、平叔雍、張道智らはすでに長逝していることを改めて惜しんでいる。

詩には、長崎の港町を囲む山々の緑と春雨にけぶる海に向って門を開く館閣の風景を懐しく展望し、官營の貿易港としての長崎にはわが国有数の語学の詔官たちがいることを讃えている。すばらしい文物は南海から春船によってもたらされ、秋には中原の詞客たちが月を賦しにやって来る。この十年の時の移りの中で風流を共にした友人たちを失ない、今や昔を語るうにも言葉もない次第だ、と大潮は感懐を詠じている。

この詩は『瓊浦遊草』の巻頭におかれるにふさわしく、この時の滞在がすでに世代交替しようとする崎陽の文人たちの様子を暗示している。かつて世に知られた劉宣義や林道栄はすでになく、その息子たちの世代に替っていた。

次にはこの詩をはじめとして『瓊浦遊草』に登場する大潮の知人であった唐通事たちがどの様な人物であったかを探索してみたいと思う。

ところで長崎の唐通事とはどのような職掌・身分の人たちであったか。唐通事は慶長九年（一六〇四）に明人馮六を使役した時に始まる。寛永十七年（一六四〇）から大通事四人、小通事二人制が始るのちにどちらも四人制となり、さらに承応二年（一六五三）からは稽古通事二人が置かれた。稽古通事は、始め来朝唐人の名家の子弟が後継者として育成されたものであった。しかし日本人社会への同化も進み、また貿易業務の増加とともに宝暦元年（一七五一）には四十人の稽古通事がおかれ、その実務者として勤務する制度になった。この外、唐通事目付、風説定役、御用通事、値組立合通事、唐通事諸

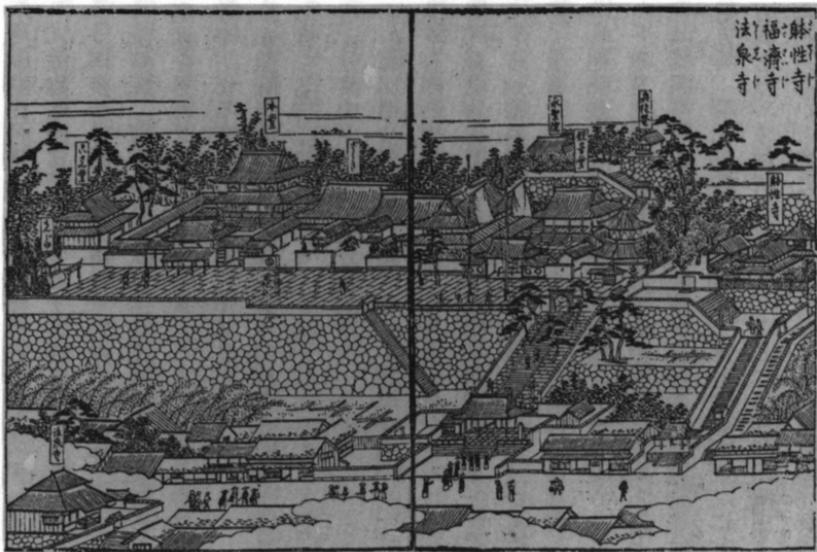


図2 福濟寺等図（『長崎名勝図繪』）

立合などの管理職も置かれ、職制は拡大していった。いわゆる「訳司九家」と呼ばれる名家や本通事の家系は七十家を越え、さらに中国各地域別の内通事や唐人屋敷詰番など合わせると二〇〇名をこす唐通事たちが存在した。貿易高の制限などで時代によって増減はあるが、阿蘭陀通詞を加えた人数は四〇〇名を下らないであろう。十七・八世紀の長崎の町には貿易実務ではあったが、外国語を自在にこなすプロの通訳集団がこのように存在したのである。

大潮は彼らの詩会に迎えられ、ともに興じたのであった。

この旅で大潮が滞在したのは、下筑後町の分紫山福永寺であった。ここは唐僧寛海が寛永五年（一六二六）に開創した黄蘗派の寺である。興福寺が南京方であったのにたいし、漳州方の寺として建立された。『長崎名勝図繪』には、「寺は山に踞まり、江を呑み、海帆の幅輳を眼下に眺覽す、鎮治第一の勝景なり」と記す（図2）。

大潮は初め寺内の末庵永聖院で過した。延宝三年（一六七五）に二代目の唐僧慈岳が建てた隠居所。「四月二日遊永聖院即興」（13）に次のように詠じている。なお、（ ）内の洋数字は『瓊浦遊草』所収の詩に付した通し番号である（以下同じ）。

古寺樓臺枕海波 古寺樓臺海波に枕し

洞庭山色晚来多 洞庭山色晚来多し

登臨悠爾當軒坐 登臨すれば悠爾たり當軒の坐

雨後千帆画裏過 雨後千帆画裏を過る

永聖院（図の右上）は本堂より一段高い奥にあり、最も見はらしのよい所であった。波を枕にして立つ古い樓台。あの洞庭湖を思わせる夕暮れの風景。ここに登ると心はゆったりと解き放される。雨上りの海を帆かけ船が通り過ぎようとしているが、まるで一幅の画を見るようだ。

永聖院では八月十五夜の賞月の詩など数篇が詠まれている。また大潮は同山の紫雲亭でも過している。「歳晚紫雲亭偶成二首」（122）は次の通り。

分紫山中一小亭 分紫山中の一小亭

海烟廻合擁松扇 海烟廻合す擁松の扇

暮寒西嶺含斜月 暮寒西嶺に斜月を含み

歳晏南天見聚星 歳晏南天に聚星を見る

歩到梅邊風雪浄 歩み到る梅の邊は風雪浄く

坐看月襯雨花馨 坐ろに月襯を看れば雨花馨し

他郷幾度迎春色 他郷に幾度か春色を迎う

遮莫河橋柳已青 遮莫河橋の柳已に青からんと

「紫雲亭」は古く木庵性瑠が松林の中に建立した福濟寺の末庵で、元禄時代にはすでに廢されていたらしい。その名にちなんで、開山堂の下段に寛保三年（一七四三）に七代住持大鵬が建てたのが「紫雲庵」である。大鵬は延享元年に黄檗山十五代となって福濟寺を去り、ここには和僧が庵主として住んでいた。大潮は木庵との縁を思つてか、これを「紫雲亭」と呼んだらしい。ここも港を一望できる絶景の地であり、俗塵を離れて心を悠然と解き放す一詩境であった。

時にこの山を下り、ともに詩会を楽しんだのは次のような人々であった。

林百載 元祿二年（一六八九）生、延享四年（一七四七）一月九日没（59歳）。福建省福州府福清縣出身の住宅唐人林楚玉の子孫でその五代目。ただし父二木仁兵衛道壽に嫡男がなく、平野平兵衛の息であったが養子となって林氏を継いだ。宝永六年（一七〇九）稽古通事、享保四年（一七一九）小通事末席、同十二年風説添役を勤め、同十六年に大通事、元文元年御用通事兼大通事、寛保三年唐通事諸立合を歴任した。はじめ二木幸三郎といったが、大通事職につき林氏を名乗った。名百載、字は豊成、仲学と号した。『唐通事会所日録』には、宝永六年（一七〇九）四月十八日に稽古通事を仰付けられた記事がある。養父は同月二十二日没した。以後、幸三郎は通事職を果していく。墓は聖壽山崇福寺に現存する。「老妣 景福院照見文甫林老居士／清輝院照珠貞鏡林尼公」とあり、妻とともに葬られている。林氏の初代楚玉はこの崇福寺の壇主として創建に寄与した人物であり、この楚玉夫妻の墓を中心に林家諸代の墓が並んでいる。

大潮が林百載を知ることになったのは享保五、六年のことではなからうか。『西溟餘稿詩部』下に「近ヨロ別ニ林百載ニ因テ有ニ此一寄一」と題する七絶があり、その起句に「十年臂ヲ交ヘテ曾游ヲ問フ」とある。この詩は享保十五年秋の作と推測できるもので、逆算するところ考えられよう。大潮四十歳前半、百載は三十歳前半で小通事末席になったばかりのころであった。本書にはまた、享保十二年（一七二七）秋の作「寄ニ懷ニ林百載一」「林百載陪ニ清人ニ講ニ御ニ櫻桃陌ニ贈ル二首一」などの七絶がありその交遊の様子が知られる。

『魯齋稿』一には、寛保三年（一七四三）秋、百載宛書簡「寄林居士百載書」を記している。「不覩光範、忽已十載矣、起居康寧、深可喜慰、皓老且衰、歸郷四年、而府公賜地城北、則弗獲去之他邦矣、然幸有數畝之田、得以養疴小竹林下、間散自適也、誠鶻鷄一枝哉」と、江戸、京畿の滞在を終えて帰郷後蓮池の小庵でみそさざいの如き閑散自適の生活を伝えている。また、同年十月の「寄林百載居士書」には「聞足下以大通譯陞而為譯子總理、寵榮輝光、獨集于足下之身」と、唐通事諸立合に登りつめた百載への祝意を記す。

平叔雍 おそらく唐通事と思われるが、今その素性を明らかにできない。『西溟餘稿』下に享保十二年冬「平叔雍、席上賦此_レ贈_ル之_ヲ」、その翌春の「留_ニ別_ス平叔雍_ニ」及び享保十五年春の「春日訪_ニ平叔雍_ヲ他_ニ往_テ未_レ歸_ラ因_テ作_ス之_ヲ」の三作が見え、親しく家を訪問している様子がうかがえる。『魯齋稿』四には、延享四年（一七四七）初夏ごろに書かれた「弔平叔雍」の一文がある。本簡は平叔雍の死を追悼するもので、その弟にあてたものと思われる。これには、帰郷以来三年間の無筆の欠礼を詫び、母の死などによる取り込みのことなどを記す。正月に令兄の病が篤くなり起つことが出来なくなつたことを聞いて驚愕したことを述べ、「皓也昔少、與令兄弟者、游國先生之門、乃交誼之深、魚水弗啻也、令兄天才秀逸、辞藻宏麗、崎陽人物、并足下為二美矣」と昔をふり返る。これによれば、大潮は若い頃この兄弟とともに國思靖の門人として学んだという。とすれば、それは元禄末年のことと思われ、古い交遊があつた筈である。

また、この弟と合せて「為二美」とあるように、この二人は田美伯、田美仲の兄弟のことと考えられる。

『瓊浦遊草』には「和田生美伯見寄」（111）、「和田生美仲見寄」（112）の七律があるが、これには「原什附」として美伯、美仲兄弟の詩が掲げてある。寄せられた二詩に、大潮が脚韻を合せて和した作である。同書には「春日訪田美伯美仲二才子」（187）「贈田美伯美仲兄弟二首」（188・189）、「春日遊田美伯美仲常棣館、分韻得深字」（192）があり、宝曆四年（一七五四）春の長崎滞在時の雅交の詩が記されている。

「和田美仲見訪之作_并序」（194）

美伯美仲瓊浦田某二子也、相與嗜學、恒好樓居、扁其居室、曰常棣之館、一日延余及玄翹遊焉、高君秉亦來、因各分韻賦詩、詩若干首、已成、大以為為歡焉、先是美仲有訪余紫雲亭詩、出以見跡、時已秉燭、雨亦驟至、乃辭以言歸、則承監興護送云、明日予在文學明所、阻雨、忽憶前者美仲訪詩、遂買餘興而追和之、実為甲戌閏二月十七日也、

南溟鵬拳地 來值雁行時 棣萼青春嫩 仙樓白日遲

諸天頰極目 百世並開眉 何厭敲寥闕 憐才是我師

この詩は同年閏二月十七日の詩会の折のもので、大潮、高君秉（暘谷）らが田二美の常棣館を訪れての雅交がしのばれる。『魯寮稿』九の「報田美伯美仲兄弟」は、宝暦五年夏ごろの書簡であるが、それは田二美から贈られた詩稿への批評が書かれている。二美の稿を朗誦し楽しんだことを記し、「斯已五言之神境、亦與明郷相伯仲、予因意竊謂、才思雖二子天性乎、而此暘谷陶冶之力也、予也固喜欲狂、二子其勉之」と二美の才が開かれたのは、暘谷の崎陽における人材薫陶の力量による。ところ少なくないことをいう。暘谷は寛延年間に京都へ遊学し龍草廬らと親交があつた。帰郷後「芙蓉詩社」を結成し、その中心にあつて活動、少なからぬ影響力をもつていた。おそらく田二美の兄弟も、暘谷よりははるかに年長であつたと思われるが、詩社のメンバーとして加わつていたのであろう。

張道智 生年は未詳。『禅林寺過去帳』の寛延二年（一七四九）正月十三日の条に「道智寂仁居士 寛延二巳正月 清川榮左衛門事」とあり、没年だけはわかる。『長崎実録大成』卷十「日本住居唐人之事」に「張三峰 清川榮左衛門祖」とあり、この人の子孫で五代目の唐通事。『訳司統譜』によれば、享保五年（一七二〇）一月稽古通事見習、同年八月稽古通事、同十一年十月小通事末席を仰付けられている。右のように寛延二年に病死するまで二十九年間同職にあつた。はじめ久左衛門、のち永左衛門、榮左衛門と称した。諱は映井、号は公龍。『禅林寺過去帳』には寛保四年（一七四四）十一月十日の条に「道順寂徳居士」という人が「清水永左衛門兄」と出ていて、道智の兄であることが判る。『訳司統譜』によれば、道順は元禄十五年九月から父の跡を継いで内通事小頭を勤めており、宝永五年に同役を召放されている。なお、『瓊浦遊草』の「贈張好問」（83）のこの張氏もこの人の一族と思われるが未詳。

宮田安氏が紹介されているように、この榮左衛門こと張道智は、享保十四年（一七二九）春、將軍吉宗の御用物の象を屈ける随員として従い、江戸へ赴いた。その時のことは『通航一覽』百七十五、百七十六に〈御所望象始末〉の記録がある。享保十一年冬、東京の船主呉子明が命を受け、同十三年六月十三日に鄭大威が広南から七歳の牡象と五歳の牝象の二頭を唐十五番船でもたらした。このうち牝象は、同年九月十一日死に、牡象を牽いて同十四年三月十三日長崎を出発。京着は四月

二十日で同二十三日に帝の謁覧があった。同五月二十五日に象は江戸に到着、同二十七日に將軍の上覧がとり行なわれた。巨大な外国の異獣の道中は大変な評判だったらしく、この年『詠象詩』（奥田子享編）二冊、『馴象編』（林信充等）一冊、『馴象俗談』（井上通熙編）一冊、『象志』一冊等が早速に出版されている。

長崎市立博物館には、この時張道智が象を献上する詔官として随行するに際し、知友から贈られた送別の詩文を収めた詩巻を所蔵する。その内の一つ東谷謙光の送別詩を次に掲げておきたい。

戊申夏南越載馴象入崎 巳酉春進獻 東府

公龍張茂寸領 鎮墓命譯從而行作此 餞

之祈 正

迢通関山遠奉官 權哉英俊旅情寬

洛陽花入詩囊重 富士峰侵剗氣寒

博物談通蕃象語 刻丹才遇魏王歛

為期賜錦言旋日 光彩當驚闔圍看

東谷野衲謙光

高君秉（6）（15）（24）（59）（110）（177）（193）（204）（206）（207）（210）（229）（235）（237）（240） 享保三年（一七一八）生、明和三年（一七六六）十月三日没（48歳）。原姓は高階、唐通事渡辺春庵の養子となる。通称忠藏、名は彝、字君秉、号は暘谷。『先哲叢談後編』（東條琴台編、文政十二年成）には、唐通事の職を嫌った暘谷は寛延年間に上京し名士と交わり、世評を得たが、友人龍草廬と共に相互に詩才を褒めあい、識者の失笑をかうことになり、やがて清商の謀り事にのせられ沈歸愚の答書、和詩及び呉中七子の和韻などの偽物を贈られ、それを信じて騙された経緯を記す。京畿で六年を過して長崎に帰国後、芙蓉詩社を結成し、大潮を師と仰いで詩作活動に明け暮れたが、「毒瘡を患いて卒す」（亀井南冥『我昔詩集』）という。暘谷の著

作としてその名が知られるものに『五経音義補』二十卷、『咏物詩雋』八卷、『暘谷詩稿』七卷、『病榻草』一卷、『清七才子詩選』七卷、『明七才子詩読』七卷、『瓊浦社草』二卷、『楽府変』五卷、『高暘谷詩草』二冊などがあるが、いずれも現存するかしないか未詳。『蓬壺楼印彙』二冊は国会図書館に所蔵する。

暘谷がいつ頃から大潮に師事したか詳らかではない。ただ最も親交を深めたのは、この宝暦三、四年の大潮の長崎滞在の時であつた。

以下には、この折の二人の交遊を示す詩を瞥見してみたい。この時期は暘谷の別号「君秉」を使っているのではらくこれに従う。

『瓊浦遊草』の「春日訪高君秉有詩次韻」(6)は、大潮が長崎を訪れてまもない頃君秉宅を訪れた際の作品である。城のほとりの坂道を散歩しつつ訪れ、青雲の志を持つ君秉に会って、わが白髪を忘れるほどの気概を感じたと記す。

初夏になって再び大潮は君秉宅を訪れた。

四月九日訪高君秉席上賦贈(15)

四月晴風吹客衣 四月の春風客の衣を吹く

杖藜来叩故人扉 藜を杖つき来りて故人の扉を叩く

相逢共倚南窓坐 相逢ふて共に南窓に倚りて坐す

滿架書編映夕暉 滿架の書編夕暉に映す

藜の杖をついて訪れた大潮は七十五歳。君秉は三十五歳であつた。「故人」というからすでに君秉とは早く面識があり、交遊がなされていた筈である。師と仰ぐ大潮を君秉は書齋に迎えた。折しも滿架の書籍が夕陽に映えている。そこに座す二人の姿と雅交の場面が思い浮かぶような詩である。

『松浦詩集』(元文五年刊)以来古文辞派詩僧として名声のあつた大潮であるから、おそらくは君秉が入門を希望して、親近を求めて来たのであろうが、それはいつ頃のことであろうか。管見では『魯寮稿』五に記載する次の作品が最も早い時

期のものと思われる。

和高君秉見寄

長崎船津町、高村忠藏、名辨

一望城南海水長

孤鴻影冷夜來霜

何料錦字勞相問

鏗爾瑤音落異方

十二月初三日

これは君秉からの手簡の詩に和韻したものと思われるもの。君秉は詩の添削など求めたらしいが、大潮はその美しい詩句は玉の落ちる音の如くだと讃えている。これは延享四年（一七四七）十一月三日、佐賀金立村にての作である。ということは、君秉が二十九歳の時であり、この宝暦三年を溯ること六年ということになる。題の下注に「長崎船津町、高村忠藏、名辨」とあるのも二人の交流の始りを示すものであろう。

また『魯寮稿』五には、翌延享五年二月初旬の作〈寄懷高君秉〉がある。

遙思彼美在西方

明月清江查渺范

彩筆至今看錦字

青山憶昨坐華堂

池中神物君龍變

日下才名誰鴈行

老我烟霞甘伏枕

臨流欲復駕孤航

これも暘谷の詩才を讃えたものであるが、これの四句目「青山」の下注に「前予與秉、相会崎體性寺」とある。施無畏山法界體性寺は真言宗で京都御室仁和寺の末寺。この寺は明治維新後廢絶されて今はないが、当時は岩原郷にあつて、大潮が滞在することの多かつた福濟寺と隣をなしていた。

こういった詩からみると、大潮と暘谷の出会いは、大潮が長崎へ来た延享二年の折ではなかつたかと推測される。その年大潮は六十七歳、暘谷は二十七歳であつた。

ところで、この宝暦三年の大潮の長崎來遊に際しては、君秉が一時の居住の世話をしたようである。「魚街館并序」（24）と題する長詩の序には「瓊浦魚街置一小舎、為居人玉氏別荘、而街不鬻魚、淨潔甚、高君秉者、風流嗜文、雅亦欲息余於瓊

浦、乃索居士以延余、実探玄興謀焉、余病且疲、不欲擇攸、孟夏下浣、愴然而往、因作魚街館一篇、非避名也、戲以為諷也」と記す。五言の長詩は「魚街非鰓魚 是名何人始…」と戯れたものである。市中の魚の町にあった玉氏なる人物の別荘を、大潮の病疲を癒す場所として君秉が斡旋したことへの謝意をこめて作ったものである。「高君秉は風流にして文を嗜み、雅より亦瓊浦に於て余を息はしめんとす」という弟子の心遣いを受けている。

『瓊浦遊草』には「和高君秉月夜見寄之作」(59)、「曉起对雪懷中高君秉」(110)など、君秉から寄せられた詩への唱和があり、交遊の跡がしのばれる。翌宝暦四年閏二月の「和高君秉見寄之作并序」(177)は紫雲亭に滞在中の作品。夢の中で君秉が大潮の寓居を訪問し、詩を賦し、文を論じた。そして夢中に得た一句に和韻した作だという。

先に平叔雍の項で「春日遊田美伯美仲常棣館分韻得深字」(192)をひいたが、この日は暘谷も同席している。「同題和高君秉韻」(193)がその時の作で、君秉の原詩も附されているので次に並べ掲げておく。

君秉原作

雨後金樽宴辟疆 看山諷詠旣年芳

麗文元奪龍鸞彩 柔翰並懸日月光

交筭棣華春韡々 映階玉樹晝蒼々

非因陶謝風流甚 法旆何能出寶坊

同題和高君秉韻

春風浩蕩絕封疆 雨後園林著衆芳

滄海明珠懷裏出 青山白壁賦中光

披襟來借幽亭色 憑館坐見客鬢蒼

况復主人清興發 招吾忽下薜蘿坊

また「春雨日偕高君秉諸子集劉重夫宅、分韻各賦得山字」(204)も君秉を中心とする同人、おそらくは芙蓉詩社のメンバー

が集まり、詩会を催した時の作品であろう。大潮を迎えての詩会は、その七、八句に「共是風流知可能賦 坐來暝色未言還」と詠むように、風雅の交遊は尽きせないほどのものであったようだ。

とりわけ芙蓉詩社の中心人物君秉との交遊はもともと親密であり、『瓊浦遊草』には、その交遊の事実を示す詩や文章が十五篇記されている。中でも印象深いのは、宝暦三年の秋八月二日、君秉は最初の子を病死させ、その悲しみの詩十三首を大潮に示した時のことである。大潮は「評高君秉哭兒詩」(229)の中で、「一字一涙、予潛泣數行下、不忍終卷」と記し、君秉の胸中を受けとめてやっている。これについては別稿で触れているのでくり返さないが、師弟の間の暖かい交情を感じるのである。

次の「留別高君秉」(207)は、宝暦四年(一七五四)の晩春、一年の滞在を終えて長崎を去ろうとする大潮の別れの挨拶を託した詩である。

留別高君秉

江浦年芳静客中 倏然歸去遂飛鴻

春流艇出桃花岸 老隱山生桂樹叢

十載重遊移我疾 千秋盛事見君雄

何愁今日天涯別 知有雙魚慰轉蓬

樊子執(7)(8)(84)(209) 生年は未詳。没年は『長照寺過去帳』の安永四年(一七七五)七月二十九日の条に「慧澤院法用耕甫日樹居士 興善町 高尾嘉左衛門吏」とあるが、年齢は未詳。高尾嘉左衛門は唐通事目附役を勤めた人物であるが、なぜこの人が樊子執と結びつくかといえれば次の通りである。

『彦山勝景詩集』(瀬尾維賢編、正徳三年九月刊)七卷三冊は、筑豊に聳える霊峰で、古来より修験道の道場として知られる彦山(英彦山)の景勝を詠んだ漢詩集である。公卿・高僧をはじめ、武家、儒者、僧侶らの他、長崎の唐通事らの詩も

収められている。とりわけ卷之四は、高元泰、官梅道榮、一石如旣、林豊高、彭城善聰といった著名な唐通事を始め悦峯、雷音といった長崎の黄檗の唐僧ら計三十三名の詩が収録されており、目をひく。

その作者付に「樊子范 高尾甚八」とある。その樊子范の詩として、十二景のうち「掛笈紅梅」「花月坐石」の二首が同巻に収められている。この樊子范こと高尾甚八は、唐通事目附役を勤めた人物である。すなわち『訳司統譜』につけば次のような経歴を知ることができる。

元禄八年十月九日に稽古通事となり、宝暦六年三月に小通事、享保十二年六月に目附役となり、元文三年二月に隠居し、延享元年八月十八日に病没した。『長照寺過去帳』の延享元年甲子八月十八日の条に「圓道院知日得居士 材木町 高尾兵左衛門父」。つまり、高尾甚八の息子が兵左衛門である。

この兵左衛門の経歴を『訳司統譜』によつてたどると次の通り。初名を高尾萬之助といい、享保十四年（一七二九）十一月十六日に稽古通事見習となり、同十六年十月に稽古通事、元文二年八月に名を兵左衛門と改め、同五年九月に小通事末席に列した。延享元年に父甚八が死去。宝暦四年八月に嘉左衛門と改名し、翌宝暦五年に小通事、同九年十月三日に目附役、さらに安永二年四月二十三日に直組定立合兼目附となった。この二年後の安永四年七月二十九日に病没した。

このふたりが親子であることを示す資料を次に示す。大潮の『魯寮稿』二には次のように詩偈と書簡が並記されている。

薦樊子範居士 甲子秋八月十八日卒年八十一矣

慧命金剛不可磨 閻浮八十樂相過

遺音猶在無絃調 崎水潺々日夜多

與樊子執

令尊人之變、聞之錯愕不能禁、我昔遊崎、與令尊人相知、殆乎四十餘年、而中間或会或別、莫逆於心、傾蓋如故、白頭維新、則令尊人之謂哉、今得訃告、理當趨弔、属祭先師、新歸自洛、跋涉艱苦、且不能如意也、昔者令尊人、與東明旭公晤次、公告以欲歸華、令尊人曰、何處是他鄉邪、公微笑而已、乃知若令尊人者、識得生死去來、一合相不可得、我屋

裏人也、冀幸子執一省于此、節哀善飯、是安令尊人之魂也、不一

「樊子範」は先の「樊子范」と見てよい。この二編によって、樊子範こと高尾甚八は八十一歳の高齡で没したこと、大潮とは長崎を訪れて以来四十余年の莫逆の友としての交遊があったこと、さらには息子の嘉左衛門が「樊子執」と号したこと、親子にわたる親交が続けられたことなども判るのである。『魯寮稿』三には、延享二年（一七四五）の七律で詩偈ともいえるような「乙丑秋八月丁巳是月十八日乃值圓通院温知日得居士小祥諱辰、孝子々執、請予追薦、因作斯篇、用供靈位」と題する作、「九日重悼樊居士子範并序」と題する一周忌に手向けられた追悼詩が記録されている。

父の樊子範と大潮との親交については、『松浦詩集』下にその早い頃の作品を見い出せる。「寄二樊子範三三首」の内の一。

不レ見二樊君一、幾度、春、夢回テ清氣襲二衣巾一、
官途、年少多ク、同學、今日誰カ逢フ眼裏、人ニ

享保年間の作と思われるが、唐通事として勤務する甚八の境遇を思いめぐらしている。その第二詩の起句に「鳴瀧、別業枕シテ流ニ開ク」とあって、樊子範は市街鳴瀧の地に別業を営んでいたものと思われる。

大潮は四十七歳の享保十二年（一七二七）九月に松浦を発ち、長崎を訪れている。この時の様子は『西溟餘稿』上下に記されている。「舟中吟」はその途中の作、「九日壽ス樊子範一」は重陽の日に訪問した折の作。「樊氏カ宅守レ年」は歳末を樊子範の屋敷で過した事を詠じている。この時の滞在は翌年春までの間で、前掲した林百載、平叔雍、張道智らとの度重なる親交があった。

樊子範の没後、息子執と大潮との交遊が続けられたことはいうまでもない。『魯寮稿』三には「答樊子執」の返簡があり、また『西溟餘稿』卷之二には「信室、記」がある。後者は子執が自分の書齋を持つにつき、その命名を大潮に依頼したことへの返簡。大潮は、実を行なうための信を大切にするのは儒教とも同じであり、学を積み実あるようにと教えたことを記す。名実ともに備わるには信が根本にあるべきことを示し、「信ニ非ズハ行ハレズト、子執最クヨヤ」と父に代わることくに諭し

ている。子執はこの言を守り勤めたと思われる。宝曆九年には唐通事目役に栄進し、同十年（一七六〇）四月には『長崎実録大成』（田邊茂啓撰）の序文を当時硯学の誉高かった中山白顛（太郎八）と並んで草している。『実録大成』十六巻は長崎の街建に始まる近世初期以来の歴史、役所、寺社の草創、唐船、蘭船の入港情況とその交易及び年表等、長崎の実態を総合的に集大成したものである。

長崎聖堂の助教田邊茂啓が多くの史資料を収集し、聞き書きを加えて編纂したもので、これは公的な事業であった。その序文は、編者田邊茂啓の積年の努力と功績を賛えたもので、末尾に「寶曆歲次庚辰孟夏 長崎後学樊元袞公補氏撰」と記している。別名元袞、また公補という別号も知られている。なお『実録大成』十卷へ日本住宅唐人之事」に「樊玉環 高尾左衛門祖」とあり、この高尾氏の先祖の華名を継いで樊子執と名乗ったことも納得できよう。

さて『瓊浦遊草』には「應樊子執請席上作」二首（7・8）、「雲龍圖贊樊子執求」（84）及び「留別樊子執」（209）などの詩が詠まれている。最後の詩は宝曆四年三月、大潮が長崎を去る時の作であらう。

樊彦卿（82）（84）（167）（239）素姓、生没ともに未詳。樊氏を名乗るから唐通事高尾氏の一族（樊子執の弟もしくは息子か）と思われる。『瓊浦遊草』には「贈樊彦卿」（82）の題で「枝頭花似去年春 鏡裏霜非少壮辰 隣殺人間駒過隙 早須功就畫麒麟」と詠んでいる。大潮は、前項の樊子執の求めに応じた「雲龍圖贊」（84）と並べて「棠只軒／富莫富於守道／壽莫壽乎修辭／樊彦卿求」と記している。画家志望の若者らしい人物が想像される。また、宝曆四年二月の「和樊彦卿見訪之作」（167）や「座右銘樊彦卿求」（239）がある。後者は「物有素、水有源、懷父母德、奉天地尊、玉汝警汝以不盈、而汝無欲速成、噫硯静有餘、夫是以能養生」と、物事の根源を知ってゆったりと生きるべきことを教えている。『魯寮稿』八によれば、宝曆三年十二月十三日の作である。

三浦善三郎・同百十郎（80）（81） 生没未詳。『訳詞統譜』によれば、宝曆七年（一七五七）十月二十八日に稽古通事見習

を仰付けられ、同八年五月四日「先名善三郎〇三浦権右衛門」と改名御免、同年十一月七日に稽古通事となっている。これは「父六郎兵衛小通事並ニテ病死（宝暦八年七月一日）之跡」を継いだものである。明和元年閏十二月十八日に惣次右衛門と改名、同三年（一七六六）一月二十七日に同職を「御暇御免」となっている。

この善三郎の祖父に相当する人物に三浦惣八（先名万次平、また万次郎）という者がある。『唐通事会所日録』には、宝永四年十二月晦日に立山役所から稽古通事見習を仰付けられた記事が出る。この人は『訳詞統譜』によれば正徳五年に稽古通事、享保十六年に小通事末席、同十八年六月十一日に目附役を仰付かっているのだが、「朝鮮三浦惣八」と記されている。この三浦氏の先祖は朝鮮系であったようだ。『瓊浦遊草』には「贈三浦善三郎」（80）があり、「河水東流春日西 容光一去鬢華抵 勸君莫使分陰失 早見文名金石題」と言い、また「贈三浦百十郎」（81）には「少年易老道難聞 努力加餐學古文 但見業成名著日 頭揚父母綵馮君」と記す。いかにも道学者風の教訓めいたもの言いであり、二人はまだ少年であろうかと思われる。父六郎兵衛はこの時小通事末席であった。文才に富む父との交遊の中で、兄弟らしいこの二人の息子を励ましているのではないかと、想像される。

官梅子（156） 「官梅」の姓は、林道栄（一六四〇～一七〇八）が大通事から風説定役に任ぜられた元禄十二年からの名乗りである。この「官梅」の姓の由縁については、次項の劉氏の条に記す。道栄は『長崎実録大成』十卷へ日本住宅唐人之事に記載される福建省福州出身の林公琰の息子で通称市兵衛、諱は應栄、字は歎雲、号は蘿山また墨癡という。道栄は福州口の通事として中国語に堪能であり、詩文に秀れ、能書家として著名で、のちに高玄岱と並び「二妙」と称されたことは『長崎先民伝』學術の条や『先哲叢談続編』などに記されている。

『唐通事会所日録』元禄十二年八月二十六日の条に、長崎奉行として林藤五郎忠和が下向するにつき、町中の林姓を改めることとし、前述のように道栄は「官梅」、他は「二木」と称することになったと記す。道栄の息三郎兵衛が没した時に嫡男勝五郎はまだ五歳で、稽古通事平井仁右衛門の息子三十郎を養子とし、「官梅」姓を継がせた。この官梅三十郎は大通事、

唐通事諸立合へと上りつめ、寛保三年（一七四三）五月二十三日に没している。従って当然この『瓊浦遊草』に登場する「官梅氏」は次の二代目官梅三十郎ということになる。

『瓊浦遊草』の「和官梅子梅花盛開之作」（156）は次の通り。

海國吹陽律 瑤葩忽此開 映雲天女下

臨水洛神来 雨雪梁園賦 春風金石杯

願令調鼎實 一薦廟廊回

この二代目官梅三十郎は、『訳司統譜』によればはじめ左十郎、次に文九郎と称した。享保七年（一七二二）九月十八日稽古通事、元文元年（一七三六）九月四日小通事、寛保三年（一七四三）七月十五日大通事、延享四年（一七四七）一月十一日御用通事兼大通事、宝暦八年（一七五八）目附役、明和元年（一七六四）十二月二十三日唐方定直組立合を歴任した後、安永二年（一七七三）二月二十五日病死した。三十郎が大潮に「梅花盛開之作」を贈ったのは宝暦四年二月上旬のことであろう。

劉寛夫・劉重夫（191）（204）（243）（245） 劉寛夫は福建省福州府出身の唐通事劉一水の子孫。元禄十四年（一七〇一）生れ、延享二年（一七四五）七月七日没。享年四十五歳。俗称彭城惠三右衛門、先名惠左衛門、名は惟明、号は寛夫と称した。

『瓊浦遊草』（245）に大潮の画賛がある。

劉寛夫像賛^并序

夫瓊浦劉寛夫名惟明豈不所謂故劉君東閣

之孫素軒丈之子哉生負大志嗜學能文詩禮

傳家有祖父風其祖人善即以揚之蓋少就職

通譯唯公忘私可謂彬彬君子者矣四十五疾

以死矣惜夫其子重夫請余題贊于是作贊併
之序以應重夫需焉

於維寬子 温潤如玉 清操似梅 孰不有文

維子則才 孰不有志 維子大哉 本邦其服

形神絶埃 至今風采 山峙海開 繩々子孫

百福交來 吾今作贊 系之亭臺

寶曆甲戌春三月 甘露皓大潮題

これは宝曆四年（一七五四）三月、劉重夫の依頼によってその父劉寬夫の肖像画に大潮が贊を記したものである。これによれば寛夫は詩文で知られた東閣劉宣義の孫で、劉善聰こと素軒の息子である。

劉宣義は『長崎先民伝』學術の部巻頭に登場する著名な唐大通事。日本住居唐人劉一水の息子で俗称彭城仁左衛門、名は宣義、字は耀哲、号は東閣という。中国語に堪能で方言土語にまで通曉し、十代の頃から通事を勤めた。承応三年（一六五四）七月に來朝した隠元隆護に通事として従った。その才によって時の奉行牛込忠左衛門に寵遇され、庁舎においても宣義と林道榮とは昼夜をおかず詩文を作ったという。牛込氏は杜甫の詩「和裴迪登蜀州東亭送客逢早梅相憶見寄」の詩句「東閣官梅動三詩興」還如三何遜在二楊州」にちなんで宣義に「東閣」、道榮に「官梅」の号を授けたと伝える。宣義は元禄八年（一六九五）九月二十一日没。六十三歳。

劉素軒は宣義の息子。その跡を継いで元禄八年九月に大通事となった。俗名を彭城仁右衛門、名は善聰、号は素軒といった。『先民伝』に「性謙卑克讓、以能文名」と記すように詩文の才名が高かった。西川如見の『四十二國人物図説』『西儀集説』（いずれも正徳四年八月）の序文を草している。宮田安氏は盧氏文書の中にある蔵書目録に『劉素軒集』の書名がある」と指摘している。素軒の詩文集と思われるものだが、伝未詳。『長崎名勝図絵』には、浦上山里村に別墅を構え、老隠の生活を送ったことを記す。「浦上、幽居」と題する詩が載る。「浦上、茅堂春正ニ好シ 山櫻桃李一時ニ開ク 無情便チ作シテ有リ

情一見^ト 終日對^{シテ}花^ニ不^ニ願^{回セ}と。これはその一だが、おそらく『劉素軒集』などに伝えられた作品であらう。素軒は元文五年（一七〇四）閏七月二十四日没。崇福寺に累代の新墓があり「徳光院善聰素軒劉君 三代祖 元文五年申閏七月卒 彭城仁右衛門」とある。素軒はまた本家に対して別に彭城家を立てている。即ち本家を継いだ源三郎の弟恵三右衛門を立てた。これが寛夫である。別家は劉一水——宣義——素軒——寛夫——重夫と続く。この彭城家は向陽山光永寺に属する。『光永寺過去張』の元文五年の条に「徳光院善總素軒居士 彭城素軒 閏七月廿四日」とある。息子恵三右衛門については、延享二年の条に「廣宣院惟明寛夫劉公之靈引^{地町彭城恵三右衛門}七月七日」とある。

劉重夫は寛夫の子。はじめ恵十郎のち恵三右衛門。重夫と号した。生没未詳。『訳司統譜』によれば寛保二年（一七四二）九月五日に稽古通事、延享二年（一七四五）九月二日小通事末席、同四年に恵三右衛門と改名。宝暦六年（一七五六）十二月十三日願いを出して退役した。その跡は弟勇助が継いでいる。

『瓊浦遊草』の「訪劉才子重夫」（191）は次のとおり。

書館多幽意 詞場足賞音 新詩題竹滿

彩筆映花深 移榻聽黃鳥 間窓分翠岑

悠然歛未聲 華月上春林

劉重夫の屋敷の「書館」に同好の士が集まったらしいが、それは引地町だったのであるか。「春雨日借高君秉諸子集劉重夫宅分韻各賦」（208）の詩会もここで行われている。その他、君秉主宰の「芙蓉詩社」のメンバーたちが大潮を迎えての詩会を催した場所は、この劉氏宅の他、その菩提寺であった光永寺、前掲した張道智宅、高君秉宅、田美伯の常棣館、医師の真子佰宅、儒者田桑溪宅などであった。君秉を中心に詩会は回りもちで開かれ、大潮の指導を受けつつ楽しい雅交が行なわれていたものと思われる。

「答劉重夫書」（243）には、五十年昔に大潮は劉氏の曾祖父宣義東閣を知り、国思靖先生に華音を学び始めたこと、祖父素軒との交遊及び瓊浦の詩壇の推移を語っている。重夫とは君秉の家塾において出合い、交遊が始まったが、唐通事として

も詩文に於ても「累世名家」であるから、あなたも研鑽してほしいと伝えている。

三 大潮の雅交

大潮は故郷の唐津・蓮池を起点に江戸・京・堺、長崎と各地を旅した。その旅の中で同好の人たちと雅交を重ね、詩囊を豊かにした。同時に周縁の人々は大潮を媒介にグループを形成していく。大潮という個性の輝きがその輪を拡げさせたといふべきであろうか。

長崎の場合は、唐四ヶ寺、唐人屋敷の中国人及び唐通事という特殊な職業訳官たちの存在をぬきにしては考えられない。時代の中国への関心や会話熱が背景にあったそのことは前提である。ただ華語を自在に表現する知識人たちが大潮を迎えて、詩会は日常的に楽しみとして行われている。これは古文辞派文学運動などというよりも、大潮という一人の個性ある詩客を迎えての日常生活での雅交である。文学思潮としての古文辞は生きているが、それは底流に沈んでおり、詩も会話と同じく社交の風雅として楽しむものであったようだ。

最後に『瓊浦遊草』に記された長崎での大潮の交遊の様子を、月日をおって記しておく。

宝曆三年癸酉
(一七五三)

- 大潮、三月初め十年ぶりに長崎を訪れる。林百載・平叔雍・張道智ら諸旧知の長逝を尋ねる(1)。
- 春、張氏宅・高君秉宅・樊子執宅らに招かれ詩を賦す(4~8)。
- 四月二日、永聖院に遊ぶ(13)。上旬に文孚明宅に遊ぶ(14)。
- 四月九日、高君秉を訪問(15)。
- 初夏、唐館の華客ら七人と会し、海岸の漁婦の詩を作り遊ぶ(16・17)。
- この頃二靈山棲雲菴主堆雲禪師を訪問(21)。
- 四月二十二日、瓊浦旅館にて雨の一日を過ごす(23)。
- 五月下旬、魚街の玉氏別荘に往く。大潮の病と疲れをいやすため高君秉がとりはからったもの(24)。
- 五月節句過ての雨を詠む(25)。
- この月、医師真子柏宅をたびたび訪問、子柏の「望岳樓小集」に序す。また、五日間滞留(26~31)。
- 梅雨の頃、諸氏と真子柏亭にて詩会(34)。
- 六月穀旦、肥前松浦郡唐津の「本勝教寺報鐘銘并序」起草(26)。
- 六月十五日、肥前長崎「香焼山圓福禪寺記」を書く(27)。
- この月、『輔仁堂小集』を読む(38)。
- 七月八日、立秋の日に輔仁堂主人向井元仲宅を訪問(39)。
- この頃七月七日に没した皓台寺一丈和尚を悼む詩二首を賦す(41・42)。
- 七月十五日、盆会の詩を賦す(47)。
- 七月十八日、「松山岳峰禪師皓公碑」を記す(228)。
- 七月穀旦、「桐野山妙覚寺記」を記す(132)。
- 八月十二日、分紫山永聖院に宿す(48)。

- 八月十五日、永聖院で月見(50・52)。華客何研峯と詩の唱酬(51)。高君秉とも贈答あり(59)。
- 八月吉旦、「永聖第三代院主廓堂禪師首公贊序」を書く(230)。
- この頃、真野駿菴・柳隆元・西原良菴らの医師との詩の贈答あり(63〜67)。また雨森芳洲からの書簡に詩の返翰(66)。
- 九月九日、瓊浦神会(おくんち)を見物し、のち分紫山に登り、永聖院に宿す(71〜76)。
- この頃、法源院に遊ぶ(77)。
- 九月十三日夜の月を瓊浦西上街で賞す(79)。
- この頃、唐通事三浦善三郎・百十郎・樊彦卿・張好問・樊子執らと贈答(80〜84)。
- 真野英肅・向井元仲・後藤松英らに留別の詩(87〜89)。
- 九月盡の詩を賦す(92)。
- 十月九日、諸士とともに田桑溪宅に集い詩会(97)。
- 十月十二日、立冬の詩あり(99)。
- 十月十三日、龔恪中・林宏遠と分紫山で会し、菊をめでて唱酬(100)。
- この頃、興福寺末庵資福菴提山定和尚示寂(十月七日)により追悼詩を記す(101)。
- この頃、聖福寺六代大雄淨豁和尚看坊となるを賀した詩を賦す(102)。
- 十一月二十三日、端雲淨祥菴主三十年忌詩(104)。
- 十一月二十七日冬至、紫雲亭にて即事(105)。
- この頃、聖福寺四休菴主守節和尚に詩を贈る(108)。
- 十一月上旬、「子柏詩集」に序文を草す(158)。
- この頃、田美伯・田美仲・東菴医生・武忠甫・左君紀らと唱酬(111〜115)。

宝曆四年甲戌

(一七五四)

- 十二月穀旦、「類聚三州志序」を草す(241)。
- 十二月二十日、光永寺(一向宗)に集い、梅花を詠ず。宿泊し翌日も詩作(116・117)。
- 十二月三十一日、紫雲亭にて雪を詠む(119~121)。除夕の詩(122~126)あり。また、洛陽の高遊外を懐う詩あり(127)。
- 歳旦の詩三首(128~130)。
- 一月七日、人日および雪を詠む(136・137)。
- この頃、京洛の高遊外および東都の諸子弟を思う詩あり(138・139)。
- 一月十四日、立春の詩二首(140・141)。
- 一月十五日、某僧の帰郷を送る(145)。
- 一月十七日、紫雲亭坐雨(146)。
- この頃、近江の徳航禪師、祖旭禪衲、無隠和尚と詩の贈答(147~149)。
- この月、医師江文伯没、追悼詩(151)。
- 二月一日、百丈開山千獸大和尚五十年忌に追慕の詩(155)。
- この頃、官梅三十郎の梅花詩に和す(156)。
- この頃、売茶翁高遊外の八十歳を壽く詩(161)。
- 二月二十一日、桐野山大僧都快辨和尚没、輓詩(165)。
- 医師佐曼卿と唱酬、この頃大潮病氣(171・172)。
- この頃、紫雲亭を出て市中で約一ヶ月病氣療養する(173)。
- 閏二月、夢中に高君乗紫雲亭を訪問(177)。
- この頃、尾里天民宅にて詩會(180)。また分紫山、法源院、松林菴の詩(181~183)。

○閏二月十七日、田美伯、田美仲兄弟、高君乗らと紫雲亭を訪れ詩を示す(194)。この頃瓊浦諸士らと頻繁に往来あり(187、205)。

○三月一日、西州諸子と共に源伯民の幽居を訪問(206)。

○三月中旬、高君乗ら諸士と留別、長崎を去る(207・215)。

注

- 1 川頭芳雄『脊振山と栄西／大潮と売茶翁』(一九七四年三月刊)。福山朝丸「売茶翁年譜」(『売茶翁集成』主婦之友社、一九七六年一月刊)。
- 2 「大日本近世史料」(東京大学出版会一九六八年三月刊)。
- 3 『長崎県史』史料編第四(一九六五年三月刊)。
- 4 長崎文献社(一九七九年二月刊)。
- 5 親和銀行(一九九一年刊)。
- 6 若木太一「高階暘谷——その風貌と逸詩——」(『活水日文』二十二号、一九九一年三月)。

付記

本稿を成すにあたり種々御教示いただいた故谷村為海氏、宮田安氏及び資料閲覧についてお世話になった石川八朗氏、宮崎修多氏、慶応大学斯道文庫、長崎県立図書館、長崎市立博物館にあつく御礼申し上げます。

なお、本稿は第二十三回日本近世文学学会(一九八七年十一月二十二日、於松蔭女子大学)において「大潮の長崎滞在——『瓊浦遊草』の交遊——」と題して口答発表したものである。